

上田市教育委員会 11月定例会会議録

1 日 時

平成 21 年 11 月 16 日 (月)

午後 2 時 30 分から 3 時 50 分まで

2 場 所

上田市教育委員会(やぐら下庁舎) 2階会議室

3 出席者

委 員

委 員 長	西田 不折
委員長職務代理者	金子 泰子
委 員	生田千鶴子
委 員	春原 秀一
教 育 長	小山 壽一

説 明 員

小市教育次長、廣川教育参事、小野塚教育総務課長、中村学校教育課長、澤山人権同和教育政策幹、中部文化振興課長、細川体育課長、清水丸子地域教育事務所長、荒井真田地域教育事務所長、伊藤武石地域教育事務所長、横尾第二学校給食センター所長、浅野中央公民館長、土屋上野が丘公民館長、林博物館長

<協議事項>

- 1 真田図書館建設工事に係る契約について（真田地域教育事務所）
資料 1 - 1 により荒井真田地域教育事務所長説明

全委員 了承

- 2 公の施設の指定管理者の指定について（体育課 武石地域教育事務所）
資料 1 - 2 により細川体育課長、伊藤武石地域教育事務所長説明

西田委員長

市民の森馬術場には何頭馬がいるのか。

細川体育課長

上田乗馬クラブで持っている馬が 10 頭、それ以外で預かっているのが 8 頭、合計 18 頭である。

西田委員長

常駐で誰がいるのか。

細川体育課長

最低 2 名はいる。外にインストラクターもいる。

全委員 了承

- 3 平成 22 年度全国学力・学習状況調査への参加について（学校教育課）
中村学校教育課長説明

西田委員長

過去 2 回あったが来年は政権が変わったこともあり様変わりしてくる。それを前提に、実施された場合上田市としてどういう姿勢で臨むかを協議しておきたいというものである。

生田委員

まだ決定ではないが 4 割程度抽出して実施するという話であるが、国では今年度のように全校で実施しないのは経費に重きを置いているからか、それとも全校で実施する意味がないと考えているのか。

中村学校教育課長

費用的な面もあると思うが、学力調査は傾向が分かればいいので、全部の学校で実施しなくても全国の状況、あるいは地域の状況が分かるからと聞いている。

生田委員

上田市では、受ける学年も違うが全国学力・学習状況調査と県の学力テスト、市の学力テストを受けている、全て受ける必要があるのか。目的は学力向上のためであり、結果を検証して学力向上に結びつける作業が行なわれなければならない。全国の調査を受け、それを検証する時間的なエネルギー、抽出に漏れた学校の問題、また経費的な問題等を踏まえるとあえて全国学力・学習状況調査を受ける必要はないと思う。

中村学校教育課長

県のテストと市のテストでは対象学年、やり方、科目が違う。県のPDCAはやっただけではなく2回に渡って授業改善に活用している。全国も市も学習指導に生かしている。全国、県、市の学力テストをどうやっていくかは課題ではあるが、決して無駄ではないと考えている。

春原委員

各学校ごとに学力等の状況が個々に把握できるのは大変大事だと思う。学力をどうつけていくか、一人一人の子どもはどうか、それを基に各学校が授業改善に向かうのは大事なことである。そういう意味で全ての学校も学力調査に参加できればいい。市又は県の参加学年と全国の参加学年は違うので重複することはない。一人一人の実態把握、各学校の授業改善を進めるためには来年度も参加したい。

金子委員

難しい問題である。教育委員として見させてもらった範囲では授業は確かに変化した。この調査により指導要領の理解も進んだのではないか。個人としてはもう少し続けてもいいと思うが、現場の負担を十分に理解できていないので、学校の先生方の意見を聞いた上で決めるのも1つの案だと思う。

廣川教育参事

今3つの学力実態調査をしているが、上田市独自のものは小学校3年から5年、中学が1年と2年、教科は国語と算数である。県のPDCAサイクルについては小学校が5年、中学校が2年である。なぜかというとな国が6年と中学3年をやっている

るのでその他の学年で調査を行うということである。かつて県では希望する市町村の全ての学校で実施したが、今年度から始まったP D C Aサイクルは希望する学校を対象により行うこととして、上田市では小学校が10校、中学校が2校で実施している。これについては、学年単位であり、中学では国語、数学の2教科の学校と国語、数学、英語の3教科の学校がある。小学校は国語と算数である。P D C Aサイクルのテストの採点は先生が自分でして、その結果を持って教育事務所において指導を受ける。これは先生方のいい勉強になっている。授業改善に上手く結びついていると思われる。

国については結果データがでてくるのでそれを分析して授業改善を行っている。上田市で行なっているものには中学のN R Tと小学校のC R Tがある。C R Tは個人が中心で個人指導に向いている。中学のN R Tは全国テストに近く偏差値がでてくるので、全国と比較をしながら分析している。ダブっている所があるので多少負担感はあると思うが、手を挙げた学校は積極的に自分たちが改善していこうとする学校であるので、県のP D C Aサイクルについても負担感はないという反応をしている。これを統一して全部の学校でやるとなると様々な意見が出てくるのではないかと予想している。

西田委員長

現場の負担はという金子委員の質問の答えにしていいか。

春原委員

上田市がお金を出しているC R T、N R Tは、始まった頃を考えると各学校でそれをやっていきたい、上田市で予算をつけてほしい、できれば全学年できるようにしてほしいという状況であった。合併を機にこのようなやり方になったが、全部ではないにしてもこの調査に意欲を示してきたというのが実状である。

西田委員長

要は使い方しだいであり、教育に有効な手段として用いるかということだと思う。

小山教育長

学力向上、授業改善のためには児童・生徒の学力実態を把握しなければならない。できれば続けていきたい。学力状況調査もさることながら、学習状況についても検証していく必要がある。来年のやり方がどのように変わっていくか明確になっていない部分があるが、従来と同じようであれば引き続いて参加したい。実施校が40%あるいは40%以下という話もある。該当しない学校をどうするかといった点については、文科省の実施計画が出た段階であらためてご相談したい。

生田委員

廣川参事にお尋ねしたい。先ほど課長から傾向が分かればいいという話であったが、過去3年間の出題傾向を各学校の先生方が分析して毎回中間・期末テストに活かし、それによって出た結果を見て子どもたちの傾向を把握していくということは可能か。

廣川教育参事

これから実施することになる抽出の場合ということか。今までの結果からということか。

生田委員

過去3年間の出題傾向を見て、先生方は問題の傾向をだいたい把握している。子どもたちの学力をどう伸ばしたらいいかということについて、先生方は出題傾向を把握しているわけだから、中間・期末テストではそれに沿った問題を作り、その結果を見て子どもたちの学力を把握していくというような考えはないか。

廣川教育参事

大事なところは全国学力テストBの問題、いわゆる活用の問題でありテストの結果を見て「これはいけない」と力を入れる。中学がなぜNRTにしたかということと偏差値で出てくるので全国と比較しやすいということである。国では傾向を見るということで学力テストを行なっているが、私たちの受け止め方は授業改善であり、それは各学校で活かされると思っている。

生田委員

授業改善に活かしていただくのは大事だと思うが、全国の学力テストでなければリンクできないというわけではない。日々の小テストでも授業改善、子どもたちの傾向を見る中で、分からない所は随時ダイレクトに把握できるのではないか。全国学力テストを受けることが最良の方法ではないと思う。日々の先生方の意識はどこにあるか。日常の子どもたちの反応を見て改善していこうという思いがあれば日々の中で把握できると思う。

廣川教育参事

クラスの子どもだけ、あるいは学年の子どもたちだけを見て指導を改善していくということも大事であるが、全国の状況と比較しながら更に伸ばしてあげるということも必要であり、これをしないと先生方は不安があると思う。

西田委員長

相対的な位置関係を知りたいということだと思う。

西田委員長

平成 22 年度 4 回目の学力調査の詳細、実施要領は決まっていないうし、これから変化する可能性もあるが、今の段階で参加、不参加の方針を決めておこうということである。賛否の結果を受け市教委としての姿勢を決めたいと思う。

大事なことなので学校教育課の提案について賛成の方は挙手をお願いしたい。3 対 1 で半数以上なので学校教育課からの協議提案は参加するという方向で進めていただきたい。

国の事業仕分けの結果、詳細な方針が決まったら教えてほしい。

全委員 了承

< 報告事項 >

1 傍陽小学校改築事業について（真田地域教育事務所）

資料 1 により荒井真田地域教育事務所長説明

春原委員

騒音対策等考えていて大変いいと思った。3 つ教えてほしい。現在ある校舎と新しくできる校舎の間隔はどの位あるのか、児童登下校の主な安全対策はどのように考えているか、4 頁の平面図をみると新しい建物は事務室、職員室、校長室、印刷室という順に並んでいるが、多くの学校では事務室、校長室、職員室、印刷室となっている。このような順番にしたのは学校側の要望があったからか。

荒井真田地域教育事務所長

現在の校舎から新しい校舎までは 5m 位ある。安全性については、工事する車両と子どもたちが合しないように計画してやっていく。事務室、職員室、校長室という順になっているが、これは小規模校で事務員が 1 名しかいないので、職員室と事務室を互いに見える形にしたいという学校側からの要望である。事務員が席を外したり休んだりする時は職員室にいる教職員がいつでも対応できるようにするために壁を設けず簡易的な仕切りをと考えている。

西田委員長

デザインの特色は何か。

荒井真田地域教育事務所長

傍陽小学校の改築については、地域の皆さん 20 名位で懇話会をつくりいろいろ相談しながら進めている。その中で、傍陽地域には洗馬川、牧の内等馬に関連した名前があるので、馬がヒントになるのではないかと話している。今の傍陽小学校のロータリーは石や松を配してできており、子どもたちがよく遊んでいるため、それを中庭に持って行って子どもたちが寛げる場所にしたいと考えている。

2 平成 21 年度「家庭の日」作文審査結果について（生涯学習課）

資料 2 により澤山人権同和教育政策幹説明

金子委員

大学 1 年生に小・中・高の作文学習についてどういう意識を持っているか調査をしたところ、小学校、中学校時代に表彰してもらえたことがその後文章を書くことの大きな動機付け、励みになっているということがわかった。入賞作品に対する表彰はありがたい。

生田委員

141 点の応募があったようであるが、小学校、中学校の各応募学校数はどのくらいか。

澤山人権同和教育政策幹

小学校 9 校、中学校 4 校である。

3 平成 21 年度青少年善行表彰について（生涯学習課）

資料 3 により澤山人権同和教育政策幹説明

生田委員

表彰して自信、誇りを高めることは意義のあることである。善行の内容のところで、知的障害者更生施設の寮生を招待したり交流を深めたりということを挙げているが、障害者の人たちと交流するのが当たり前感覚、障害者等を招待したから表彰されるという感覚に怖さを感じる。一緒にいて当たり前、交流して当たり前という感覚をまず大人が持ちたい。子どもたちには、自分たちは健常者、彼らは障害者ではなく皆一緒という感覚を持ってほしい。選ばれた善行の内容で障害者との交流を持ったことが挙げられることにある意味で危険、怖さを感じた。

澤山人権同和教育政策幹

交流を始めてから障害者の皆さんが困っていることを感じ取り、子どもたち自身の活動としてアルミ缶や牛乳パックの回収を行い、その収益金で車椅子や洗濯機、また生活の役立つ物を購入して贈呈したというのが一番の理由である。

西田委員長

当たり前で当たり前に見えるような機会を、子どもたち自身が作り実行していると理解したい。

- 4 第23回上田古戦場健康・ハーフマラソン大会の開催及び第20回ともしびの里駅伝の結果について(体育課)

資料4により細川体育課長説明

西田委員長

土、日に行われた長野県縦断駅伝大会で上小チームが優勝した。こうした大会が下地になっているかわからないが続けてきた意義があると感じている。

- 5 行事共催等申請状況について(生涯学習課、文化振興課)

資料5により澤山人権同和教育政策幹、中部文化振興課長説明

質疑意見 なし

- 6 その他

「公民館だより」により浅野中央公民館長説明

西田委員長

以上で11月の定例教育委員会を終了する。